

## 埼玉県の腸管系病原菌検出状況 (2013)

倉園貴至 松下明子 砂押克彦 青木敦子

Enteropathogenic Bacteria Isolated in Saitama, 2013.

Takayuki Kurazono, Akiko Matushita, Katsuhiko Sunaoshi and Atsuko Aoki

2013年に埼玉県内で分離・届出が行われ、その性状確認等を衛生研究所で行った三類感染症の腸管系細菌は、赤痢菌3株、チフス菌4株、パラチフスA菌1株、及び腸管出血性大腸菌144株であった。コレラ菌の分離はなかった。今回は、分離された菌株の血清型別、毒素産生性等の検査成績及びその傾向について報告する。

海外感染例は、赤痢菌3例、チフス1例、パラチフスA1例であった。国内感染例は、チフス3例、腸管出血性大腸菌144例であった(表1)。

表1 三類腸管系病原菌検出状況

	国内感染例	海外感染例	計
赤痢菌		3	3
チフス菌	3	1	4
パラチフスA菌		1	1
腸管出血性大腸菌	144		144
計	147	5	152

### 1 赤痢菌

県内で分離された3株の内訳を表2に示す。血清型は、すべて*S. sonnei*で、すべて海外渡航歴のある患者から分離された。推定感染地はインドネシア、カンボジア、インドとすべて異なっていた。患者の喫食調査では、生のフルーツ摂取が挙げられている例もあり、渡航地での喫食については十分な注意を払う必要があると考えられた。

薬剤感受性では、臨床での利用頻度が高いフルオロキノロン系抗菌薬に耐性を示す菌株がインド及びカンボジアへの渡航歴がある患者から分離された。過去にフルオロキノロン耐性赤痢菌株が分離された患者はいずれもインドへの渡航歴があったが、今回はカンボジアへの旅行者から分離されたことから、その拡がりを含めて、今後も動向を注視する必要がある。

表2 県内で分離された赤痢菌(2013)

No.	分離月	性	年齢	血清型	推定感染地
1	3月	男	30代	<i>S. sonnei</i>	インドネシア
2	3月	女	20代	<i>S. sonnei</i>	カンボジア
3	4月	女	50代	<i>S. sonnei</i>	インド

### 2 チフス菌・パラチフスA菌

チフス菌が分離された患者4例中3例に海外渡航歴がなく、分離月も6月から9月であり、特にNo3及び4の事例は患者の年齢や分離月が近いことから、diffuse outbreakが

疑われた。しかし、国立感染症研究所でフェージ型別を実施したところ、それぞれ異なった型別結果であったため、その可能性は低いものと考えられた(表3)。

表3 県内で分離されたチフス菌・パラチフスA菌

No.	分離月	性	年齢	血清型名	フェージ型	推定感染地
1	6月	男	70代	<i>S. Typhi</i>	D2	日本
2	8月	女	30代	<i>S. Typhi</i>	UVS4	インド
3	8月	女	10代	<i>S. Typhi</i>	B1	日本
4	9月	女	10歳未満	<i>S. Typhi</i>	A	日本
5	4月	男	30代	<i>S. Paratyphi A</i>	2	カンボジア

### 3 腸管出血性大腸菌

県内で分離された144株の内訳を表4に示した。最も多く検出された血清型は例年通りO157:H7で92株、次いでO26:H11が38株分離された。その他の血清型の分離数はすべて3株以下で、散発例での集積性は見られなかった。分離された144株のうち46株は患者発生に伴う家族検便や、給食従事者に対する定期検便で非発症者から分離されたものであった。

患者の発生状況では、保育園での集団感染事例が2事例発生した。1事例目は6月下旬から7月初旬にかけて県西部の保育園で発生したO157:H7(VT1&2)集団感染事例であり、園児、家族、職員など対象者の検査を実施したところ、園児及びその家族12名が菌陽性となった。2事例目は7月下旬から8月中旬にかけて発生した県北部の保育園におけるO26:H11(VT1)による集団感染事例であり、園児、家族、職員など対象者の検査を実施したところ、園児及びその家族22名が菌陽性となった。いずれの事例も患者の発症日に集積がみられず、汚染食品等からの単一暴露の可能性は低いことから、保育園内での日常生活において感染が拡大したものと考えられた。こうした拡散を防止するには、平常時からの手洗い等の衛生管理の徹底が重要であると思われた。

2013年は前年(86株)と比較して分離株数が増加した。上述の集団感染事例の影響もあるが、その他の散発事例や、業態者検便等で健康者から分離される事例も増加していることから、今後ともその動向を注視し、その防止に関する啓発活動を継続する必要がある。

表4 県内で分離された腸管出血性大腸菌の血清型および毒素型

血清型	毒素型	検出数	血清型	毒素型	検出数
0157:H7	VT1&2	61	0103:H2	VT1	1
0157:H7	VT2	30	0111:H-	VT1	2
0157:H7	VT1	1	0111:H-	VT1&2	1
0157:H-	VT1&2	2	0121:H19	VT2	2
026:H11	VT1	38	0145:H-	VT2	3
08:H-	VT2	1	OUT:H-	VT2	1
098:H-	VT1	1	合計		144